源流 茶湯綱目 一

466

御手洗の本尊と論ず [illegible]
諸国諸寺の本尊不動 [illegible]
[illegible]

大山靈驗記

全部 二冊

[illegible]

皇𫝶菊丘臥山人江文坡著

烏樞沙摩金剛修仙霊要録

此書ハ佛説の仙教にて男ハ運はらく女ハ安く子ぐ生法あり
ひらかな圖入　全部二冊

烏樞沙摩明王ハ佛説法術霊要門經ニ云釈迦如来涅槃の時化出して螺髻梵王を度して不浄汚穢を化して大清浄ならしめ大神通力ある故に以て世に不浄の處に祭りて雪隠の神とす夫皆人ゟハ不浄なる者にて仏佛神ともに不浄臭気をいみて近寄たまハぬ故に悪神邪鬼等ちかく近寄て災害をなす或ハ大病大難火難水難無實難にあふ然るに此の烏樞沙摩明王を信念すれハ不浄常に清浄に化し佛神近寄玉ひ諸願成就し金銀米銭にのぞまう無病長命なり又此法術を常に行ふ時ハ枯木に花を咲せ井に水を涌し雷鳴を止め大浪大風大雨を止め或ハ鬼を使ひ又鬼神を呼て自由に使ひ人ゆとする術百種とく成就す是佛説の仙法にて四十五種の霊符佛説百変法門經の所説并に天竺漢土日本に於て雪隠の故事建揺月日の吉凶種々奇妙不思議の霊験ことく假名にて書たる道書也諸國諸方の本屋にて賣弘メ御手寄の本屋にて御求可被下候

茶湯綱目　序

夫茶湯ハ三綱領を以て本とし茶湯ハ湯中通の義といふハ明徳をあきらかにするなり謂や本天命率性の道や茶湯も如此きものハいつもの心にあらぬ也是にもの又となる処毋となる三百八十もあると是より発る事るに物有本末事

有終始知所先後則近道其
本乱て末治る者ハあらし故
十三ものを根本にして諸のもの
ハ此内にある三つの事ハ綱のもと
あらあして諺廣く色しにつる
是新民乃場あらく思ふく替あり
まおハきん人を洗濯するのこひも
古東山殿より千利休今小堀遠州

ところに至りて其命維新也ろのまでもを
古ハ論子七服宜下にありをなりし明法
為本新民為末業〳〵場と中通を
為本達しもおを為末まハ論子を
至善ことを内まつハ七服ハ其間の大
なるところのまうこ家小おもて究其根
微的ぐ知其所止無疑ある此
書を業と湯まご論よと説のまと茶

又板開せらるゝ所の三傳集并節集
流傳集等ハ俳評林六宗匠傳記
等の又此書ニ擬して並といへとも予
も往年に老衰して存命旦暮に
ありけるとおもひよし門弟中もコア
無跡なくハ板刻せしめん事ハ
今存命のうちに今板刻ニ諸人の
助ともならんとすゝめいさゝかるし

止ハ今板行まて予りなに跡めて
後學の人此末を補ふへしまた川
可也

宝永二乙酉年
八月日

洛陽隠士
遠藤廣長軒元閑謹選

茶之湯綱目　巻之一

指三手前　炉八ツ

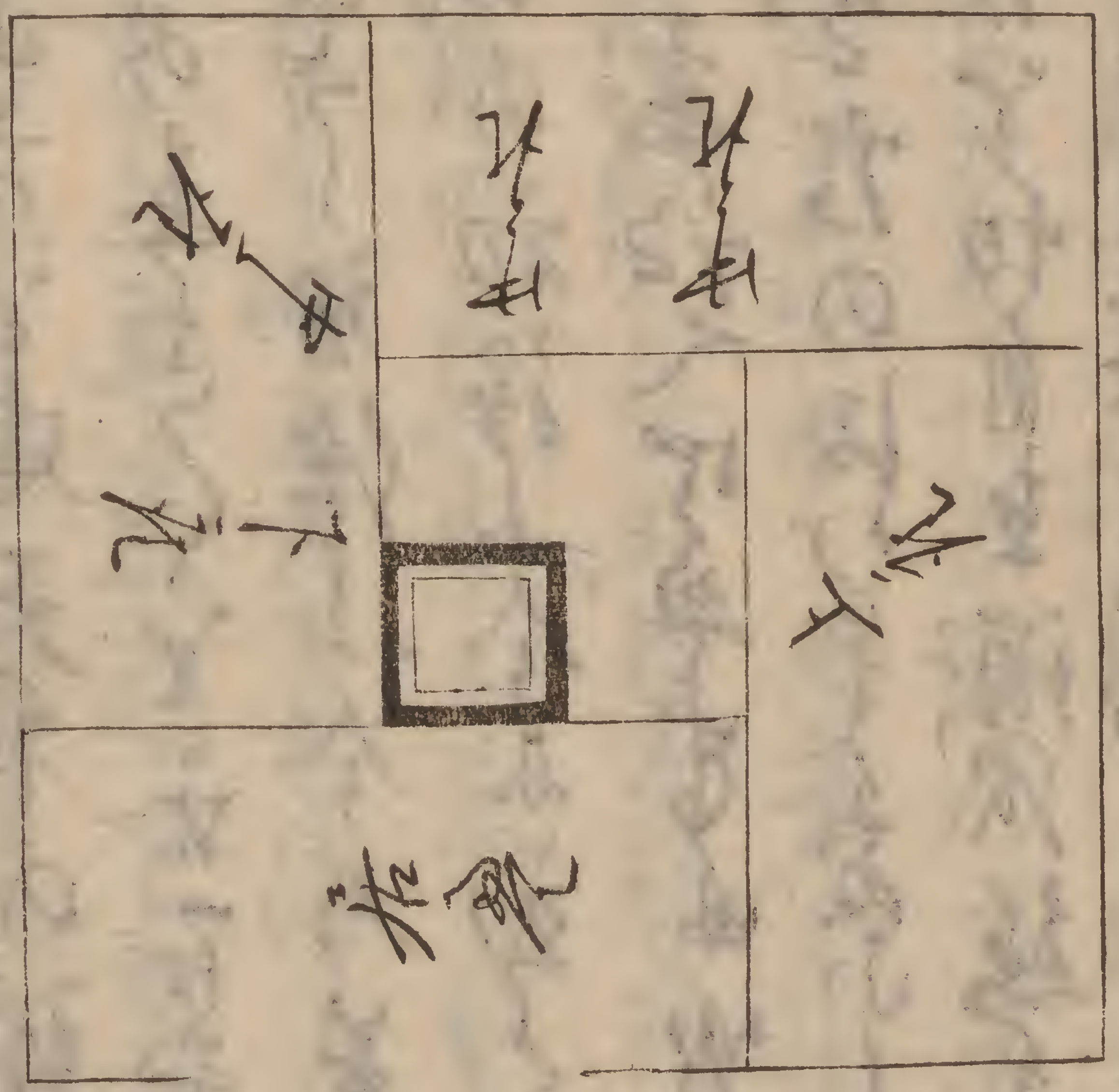
四畳半順勝手冬真の手前茶入袋入

四畳半逆勝手長草の手前書く袋入

四畳半逆勝手志の手前右合飾

三畳大順勝手志の手前茶入壹ツ文条

四畳半 順勝手



此の段ハ四畳半と云居より右へ中ハハを此ニ云

凡四畳半切と云ハ慈照院殿義政将軍
東山に山荘を建天下の珍器をあつ
め諸士のまつりことを正して御遊興
に月をめで茶の湯を給ふ今乃茶の湯と云
ハ此公の初給ふ今に至て東山銀閣
寺ハ此義政の四畳半にて水道の始に
珠光を此の道ハ正におなふして中比まて
まてに炉を切自在鎖縁又ハ五徳
まくもおる是を此始にと云
門に入右に廣間乃ゆかりなりしを

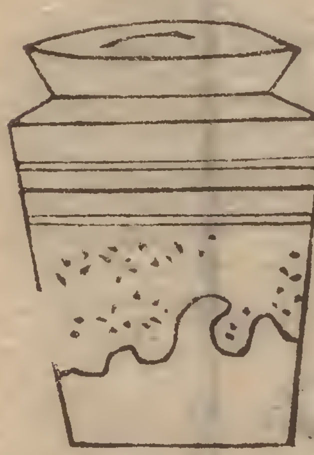
此始よりはかりて知るべし
亭主居て右へ向ふ故此と云
さしてまかりて一面乃茶をたてん
家に入て道かねて茶菓をしてもちゆれ
建てあり乃なれハ何しきたれ
炉乃内の見へぬやうさはるなんき事ハ
炭よりも所にかりけしおそ
四畳まて三畳て大乃すこしてまへ
流儀集にても志るしおよぬる
四畳半三畳て大にもすこしのちかひ

わか庭乃さくらハ上庭ともいふ
浜乃宮の下よ谷かけ西條のみそ
れのつよ墨ひきてゐへなかり
志つさりき色んけかつかね杜若
いほりみちのかひもとしれ
花ゆくろきして色へ有れどのうれしと
ゆかしかりて八重人れ外し
いろもとうでこゑへん一ことをも
菊とよみいふぬかしひあへども
萩さらや蓉那に附のもかくも

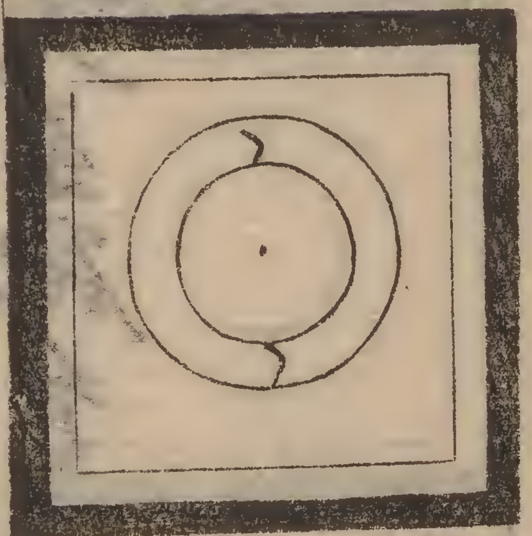
かくてもやまとなてしこ乃はな
一ふしに八千代をこめしむつるかな
こゝそいろみの花とまうすへし
鳥頭乃床みいきをゆるめ流れられ
いうみてもこゝろそれしとこゑん
さくらまてかついろみをよ梅乃花
是ゟ陳乃ことひそのもしま
三條やあかれおもてよりかれむつれ
おもらくれ水のあつ沙世の中
大籠みせきるたくあり華あちれと

わらん菊菜さ摘屋ゟつくる
かれるなも色へかゝ菊冊倚しいせて
ゆきゆ亭と乃めをしとふよう
野と山と花と色ひもみなりゆ
いなうこうんとしる人そよう
よそくにかこ面とそふ茶湯さの
こうかんちやうんさもゆかし

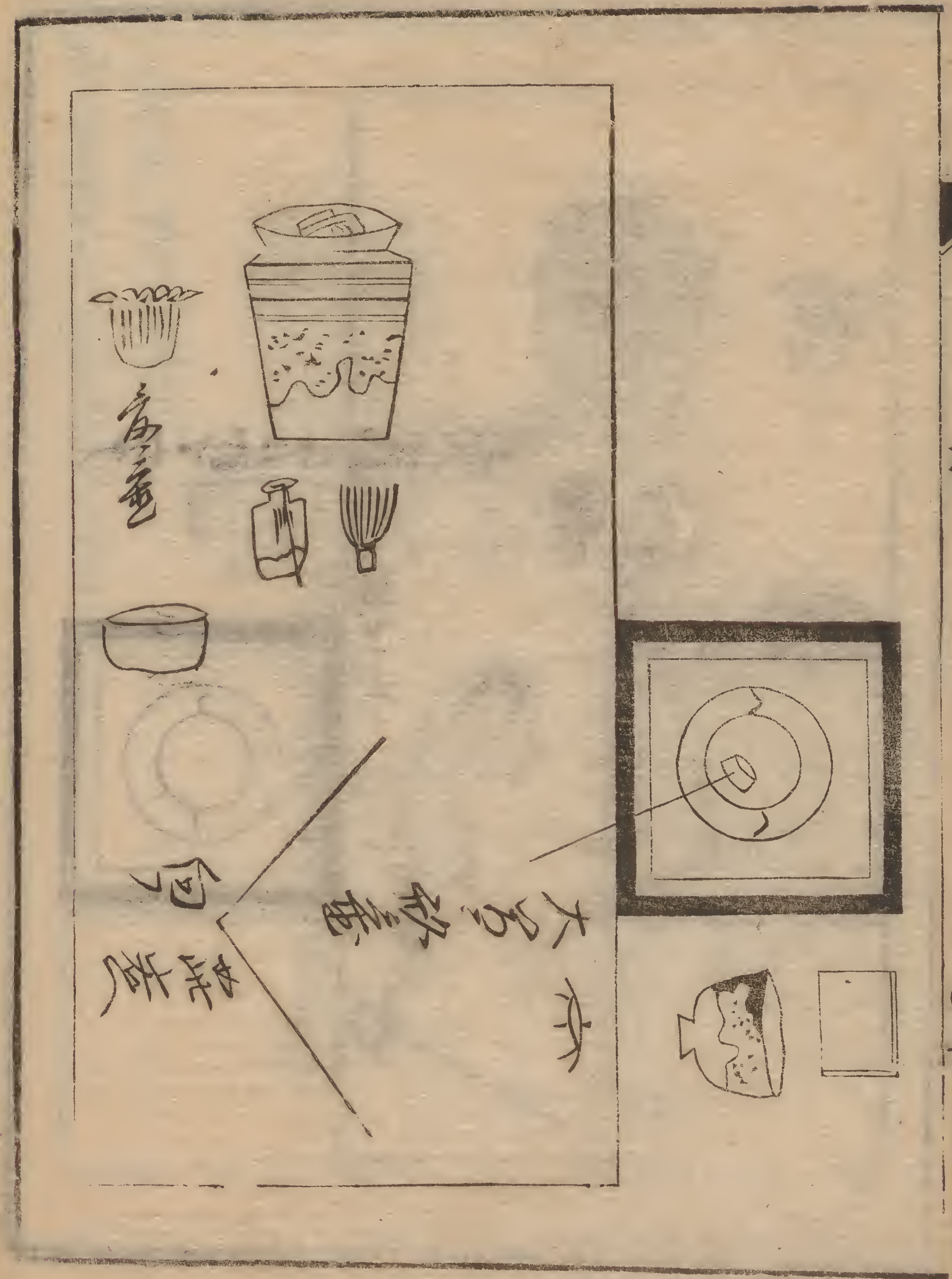
口まもとす此物を名よの
よよお茶入袋入

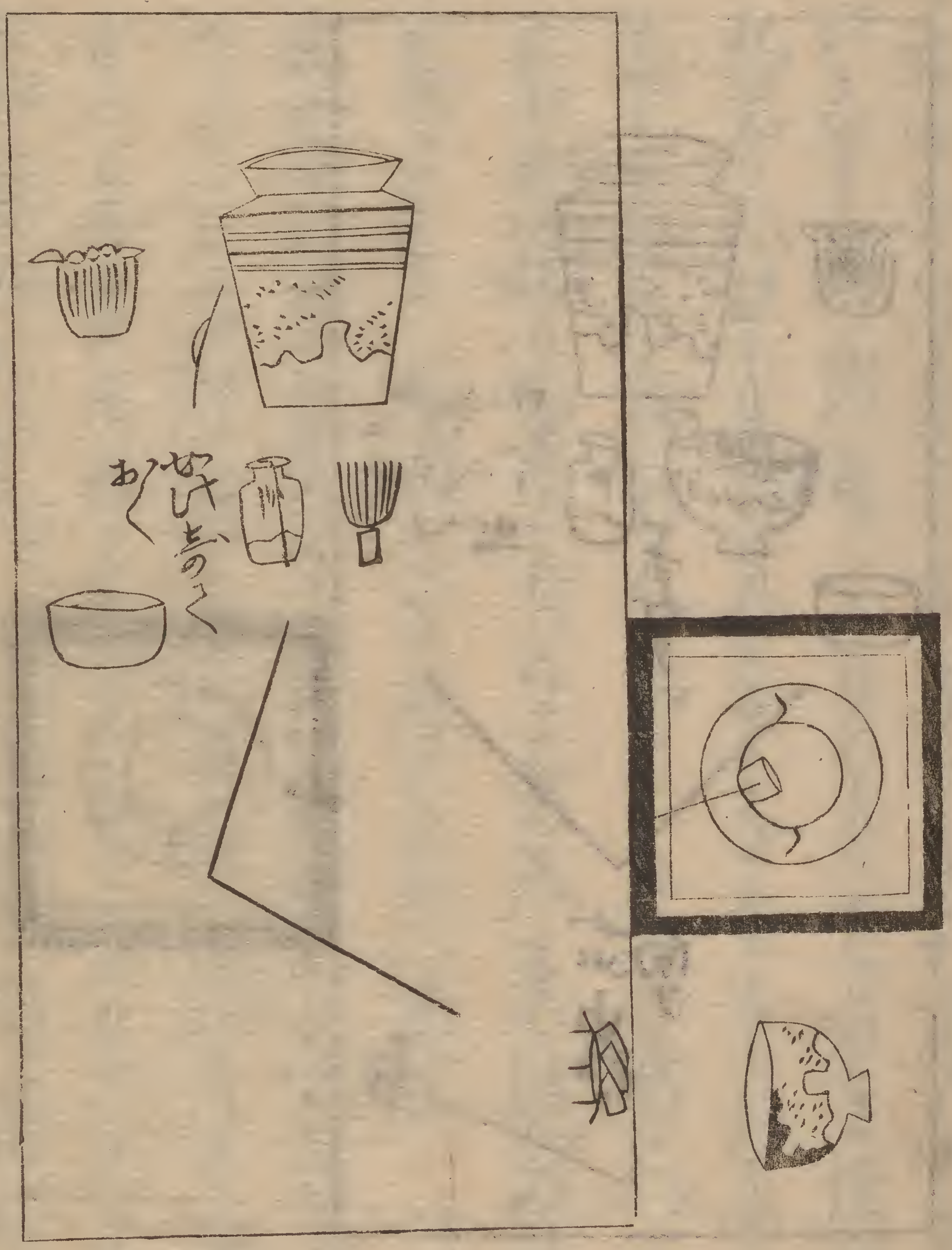


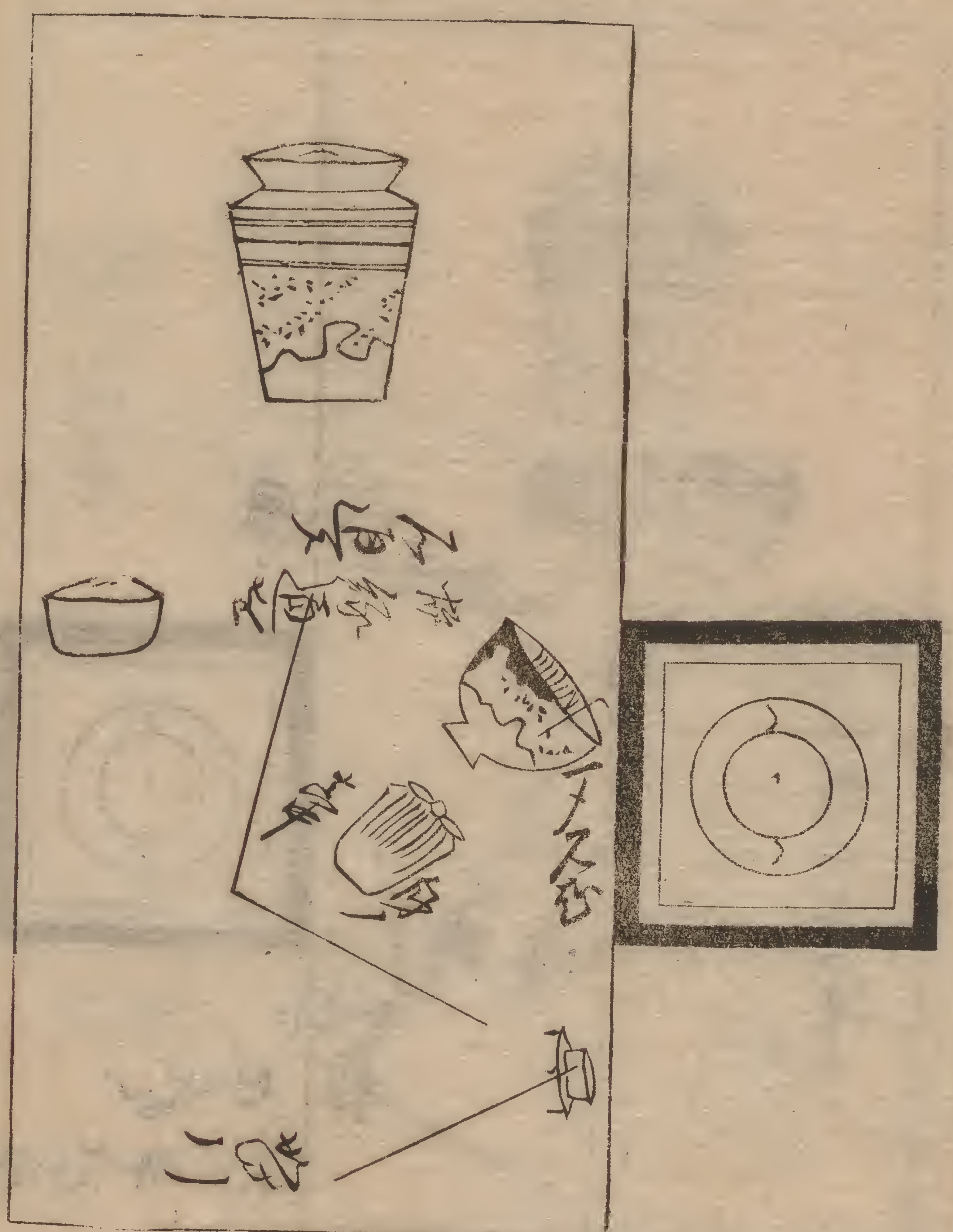
水指塩の上方来北古中



茶入茶碗方一寸四分







一右の図ハ四畳半ニ於て台子のしかた
なき時ハ文台ニ茶碗ありて先自在須棚
物なれハ少しもあるさしもしれす
おのおのハその指図ニまかせ茶入を
前に荘(カザリ)事也又茶入茶碗其
余にさまさま有れ共其時の宜に随ふ
一水盈に茶巾をしやくとかけ茶道口
乃下に置而茶を汲立少し湯を右に持
おぬ置也左にてひしやくをしれ持を
茶巾これ立のしやくにしてれ湯のこ

こく置直しやくかけ器のごとく又居直りと
とく〱しく水翻を出し上座より
下座の方へ向く目くなりして御禮有て後
火箸と組右の方へ茶碗は右へ流し
器のごとく置て右より茶入は下の
置袋と口緒袋へ器のごとく右の方て
遣し帛さばき口緒右の方へ茶入は
く中ひ口緒出器茶入置帛さばし
右のかて茶杓は中ひ口緒茶入の方へ
ふたよりの方は右のかて茶金は

器のごとくの如く右の帛は右の指の茶盃
を拂ひ口緒帛を右へ向けし右の方へ
茶巾は水指の蓋の上へ茶筅の向
縁を取り器のごとく右の方て置ても
は帛をとり茶入を茶盃は茶盃に置
帛を腰にさし右のかてひしやくとり
湯二ひしやく入柄杓右へ指帛右のかく
は釜の蓋を帛にて腰にさしひし
やく右のかく茶盃に置く茶碗を三か
湯(トリギ)しして茶碗によりて置右のかて茶

巾を出シ置て如くさめりに湯を入こと三々
杓へ上たゝみく茶碗をとを茶碗の上へ
さえくくとふりてよかうせと見く茶筅
まつ置たゝめく茶碗をたてへ渡し右をめく
ハ茶巾をとりて湯柄杓茶巾のせて三つに巾
上の湯下に置茶巾をとりて如くさめたゝみて
其杓の上に置たゝみて茶杓を右のって
茶入れたゝみて茶入の蓋を取懐に置
に湯茶を一茶しめく入御茶こく可仕
次に細緒とき入茶杓ハ茶碗にかけ

茶入の蓋して右の座へ遣し茶杓を茶と
ひろけたゝみて茶入を組たゝみてひしやくを
右へ渡し帛をく蓋の蓋を帛ハ膝よ
入右へ置ひしやくを湯を汲入る器のおとしく
ひしやくハ蓋に組たゝみて茶碗を掛置
中よりくり上右座へ遣し居直りてこ
をもとせ帛を取おし同じにたゝみ器のこ
ろく出し右のめく茶碗出し置こなハ挨
拶半居直り引ひしやくをとりて蓋の
蓋を右に置ひしやくを置のそと水蓋を置

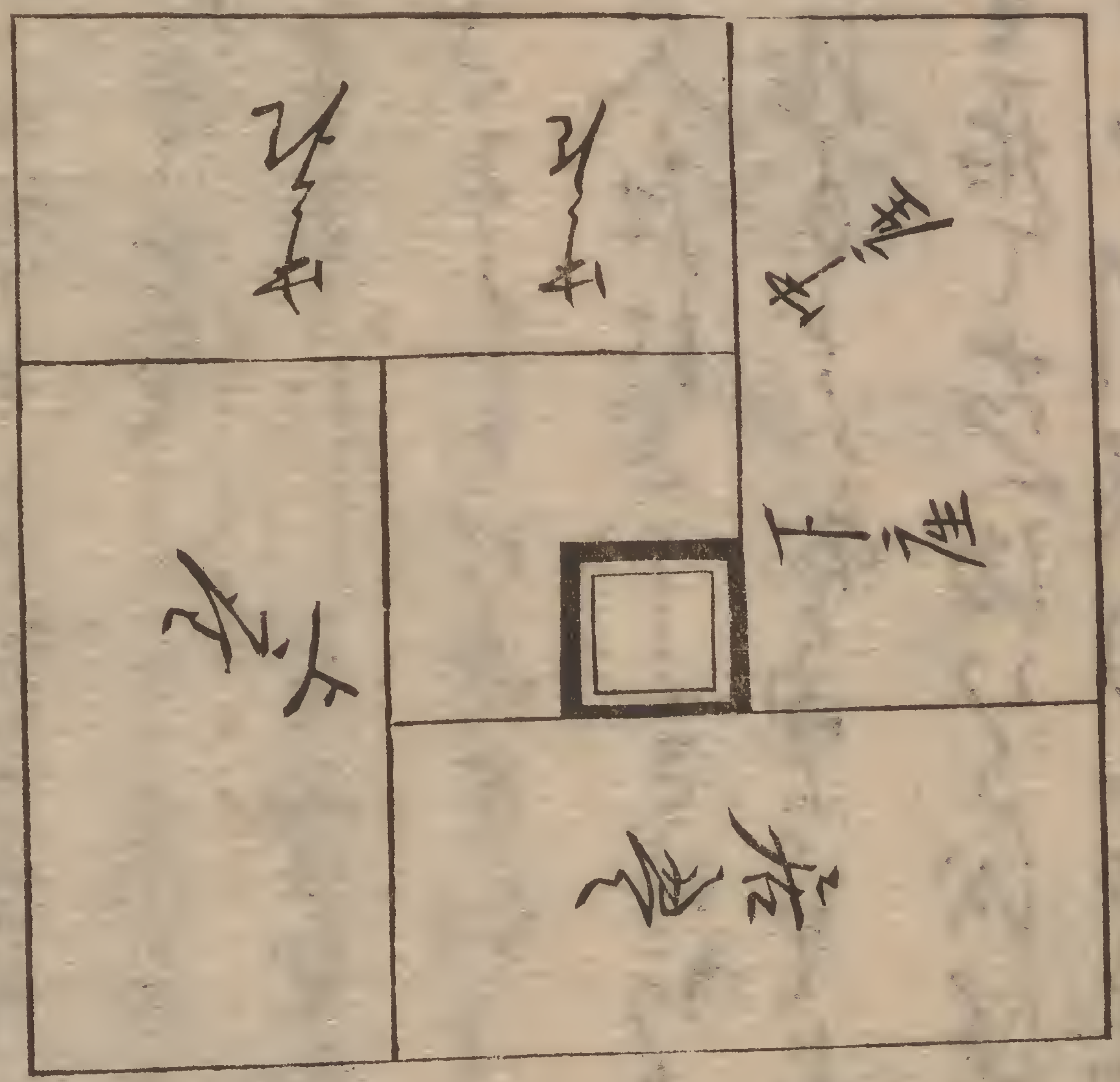
飾し並へ置茶湯(サトウ)口の戸を明ゟへ入
杓入置べし
一 帛紗(フクサ)腰より出して蓋置取出し帛紗にて釜
の蓋取帛紗ハ腰にはさミ左の手にて茶巾
取釜乃蓋へ上左の手にて柄杓の蓋を取
右へ持替左の手にて茶碗を切左へ取出し
湯のごとく右手に茶碗を持せかへ右の手に
むしやく取左よりお茶一すくい入釜へさ
し置し湯のごとくかけ置茶碗帛紗と
帰くなどんいふを前下に置ちりや茶巾置

事なき八茶筅をとりあげやく取湯一口入
柄杓ハ釜に置左の手にて茶碗を取右へ湯
し湯捨下に置又湯入水すすぎ茶碗
を釜へ入茶筅一つ二つ三つくしふりうけ上
右の手に茶巾を取湯を捨(スツ)てへ入て置
乃下に置左の手にて茶碗を取中にて茶
碗に入さしやく取帛紗取出しひらひ茶碗
よりあけ左の手にて茶入箱のごとくよせ茶
碗取右の手に茶入をとり置むしやく
取にてふた入釜の蓋を十分置し蓋置に

柄杓は居直り有て水指の蓋とれ
詠くにしくもとし其附の茶入とせ
茶碗畢下の挨拶有て出茶口の戸
を明け郎やく菓盃盆を入茶入に茶
巾ひ口傳有り出し候へし居直り茶
碗に入水指盆れ茶と盃盆に候よ
り紙を取出し有柄の所とくさかきの
茶巾ひ有柄を入直し茶入たて能附け
ま出し袋茶挨拶有て茶入取客
請し取附客立炭を取りまとめ口傳

取文を立炭添し客立らし附八中
くうまあるく出るく客亭孔有又取寄座
添て讃のまへおてうと茶まて勝し
と挨拶をとは可なし

四畳半逆勝手



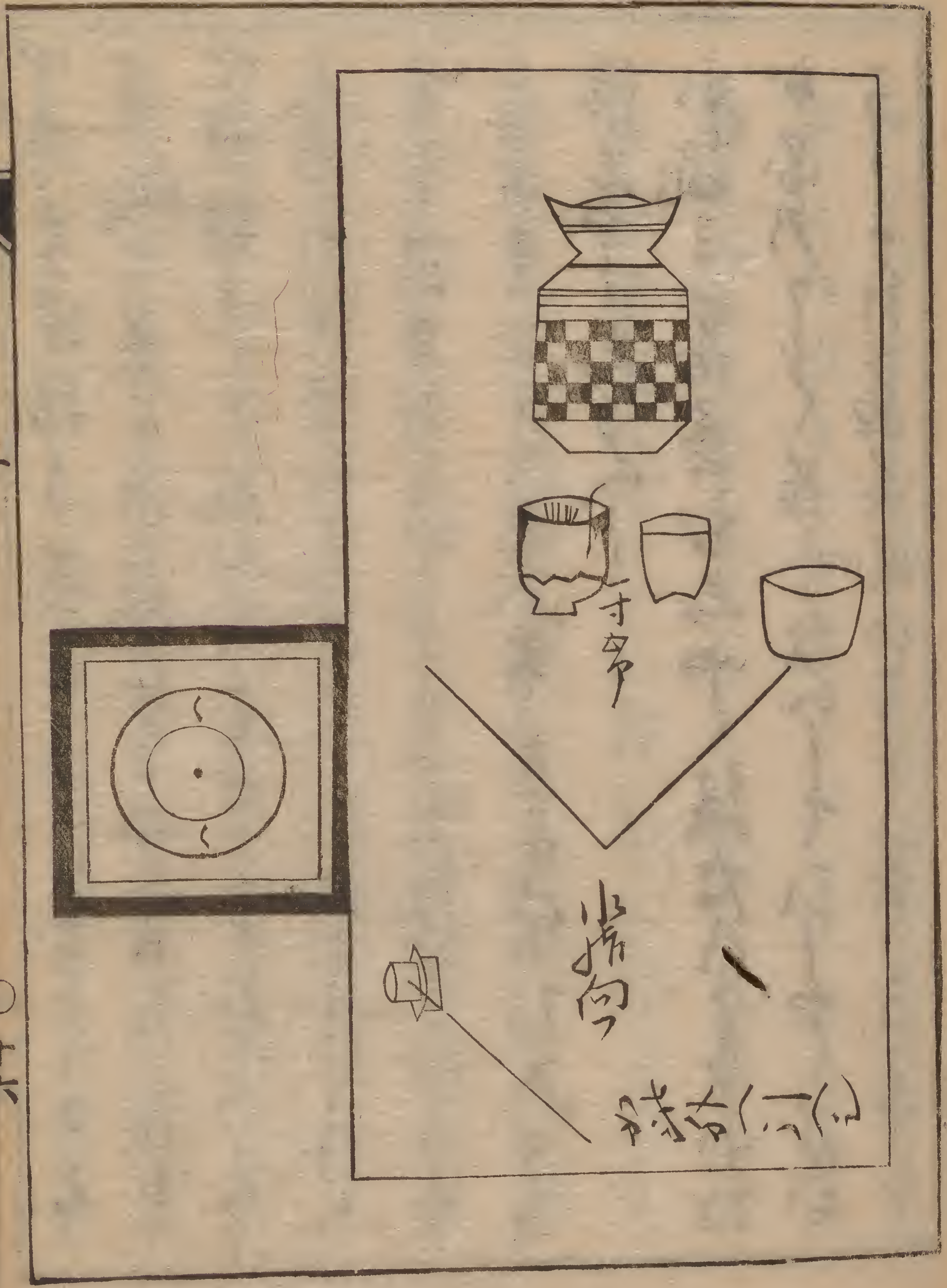
逆のまハ亭客と云居五て亭太へまハるを逆と云

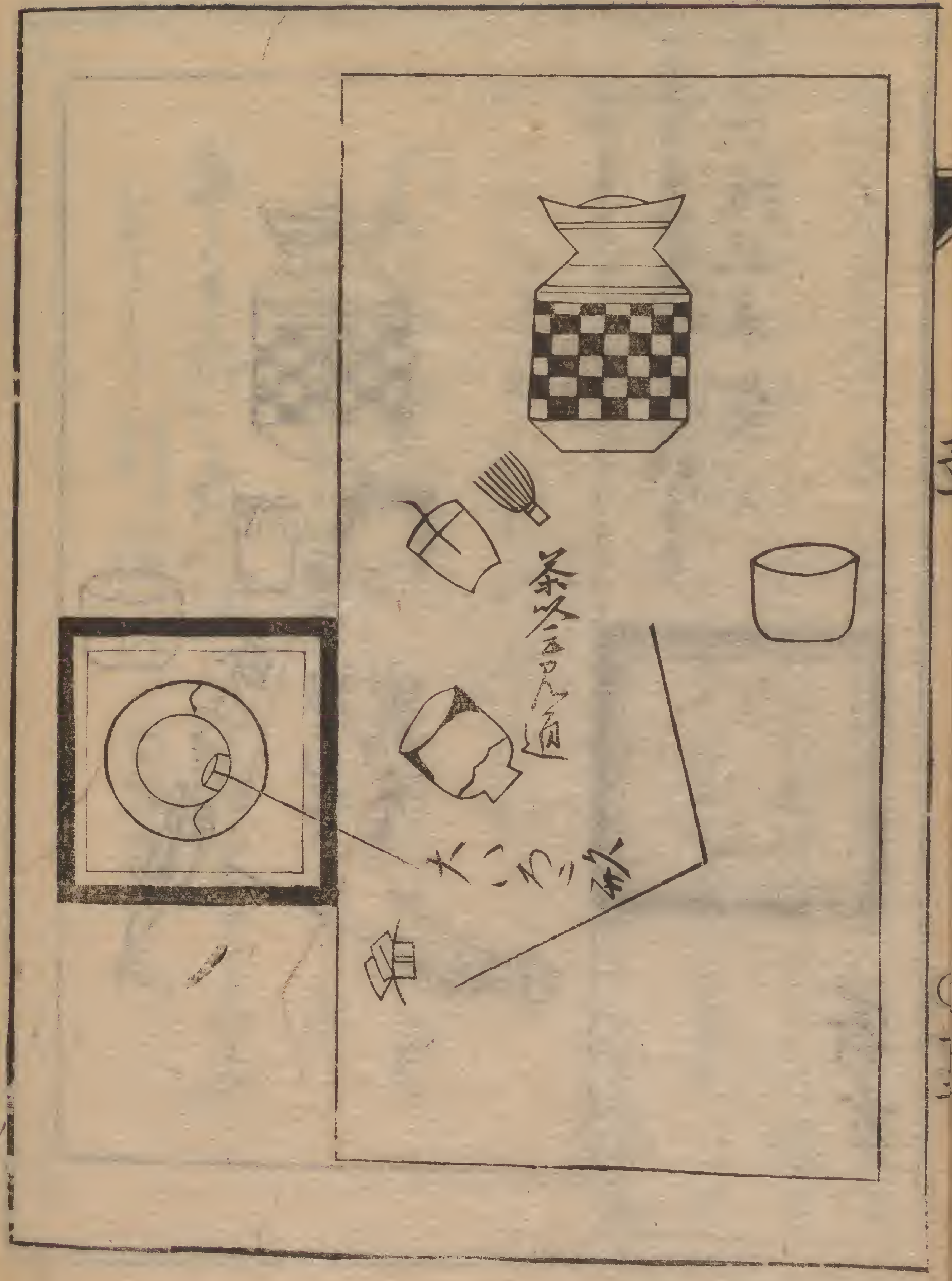
凡四畳半切と云ハ逆の仕かたにして中
乃半畳に炉を向切と逆勝手と云格ニ
畳ハ数畳ありとも居畳一つ万ふして
点の上畳に引付炉を切しる点まお
いつかさまにても四畳半切と云

間ニ入たにざしきのかまなりを
逆勝手とハ気をあんぞようさ
亭主居て大海いろは逆すへ
其の外刻従の字あん

四畳半逆勝手ニ茶入まお
大の伏郡棗袋ニ入

客方





又あまた逆勝手に異義者のにおほし云々
異様なるゆゑ此點前を好む人ハ稀也
卯月朔日より風炉へ上るといへ共炉の
人のこと候間由ある事なれども附のたて様之
事と也然るにかまひなし此勝手にてもよし
是茶たてに茶入茶入を袋に入るゝ也
濃茶とあるべし
一水翻に蓋置を入やく緒太のまゝにおゐて
置くる乃ごとく居所よりしてひしやく蓋
こしよせ蓋置置場のごとく置かざるを

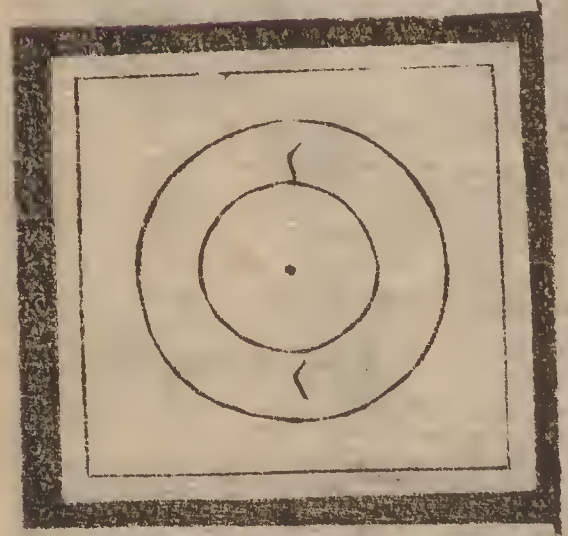
ふくさにする後乃様移湯茶碗置しおし
置きれたのまゝにおゐて茶入置様にきは蓋をいれて
押へ大なるはこそく置べし さらけ柄は其儘置下
にて蓋置前乃ごとくかけ帛紗さしにして
茶巾ひしゃく湯入て曲(カ)尺(子)あしらひ能
荘(カザ)取る茶巾ひとりに置茶入置からる
友(トモ)蓋(フタ)乃附も茶巾を茶碗取はまへし
掻つ扱れ帛紗にく茶乃蓋に湯一ひし
やく吸入となしやく茶碗をも茶碗に湯は
三つしてそれにかこつけとりて右に建茶

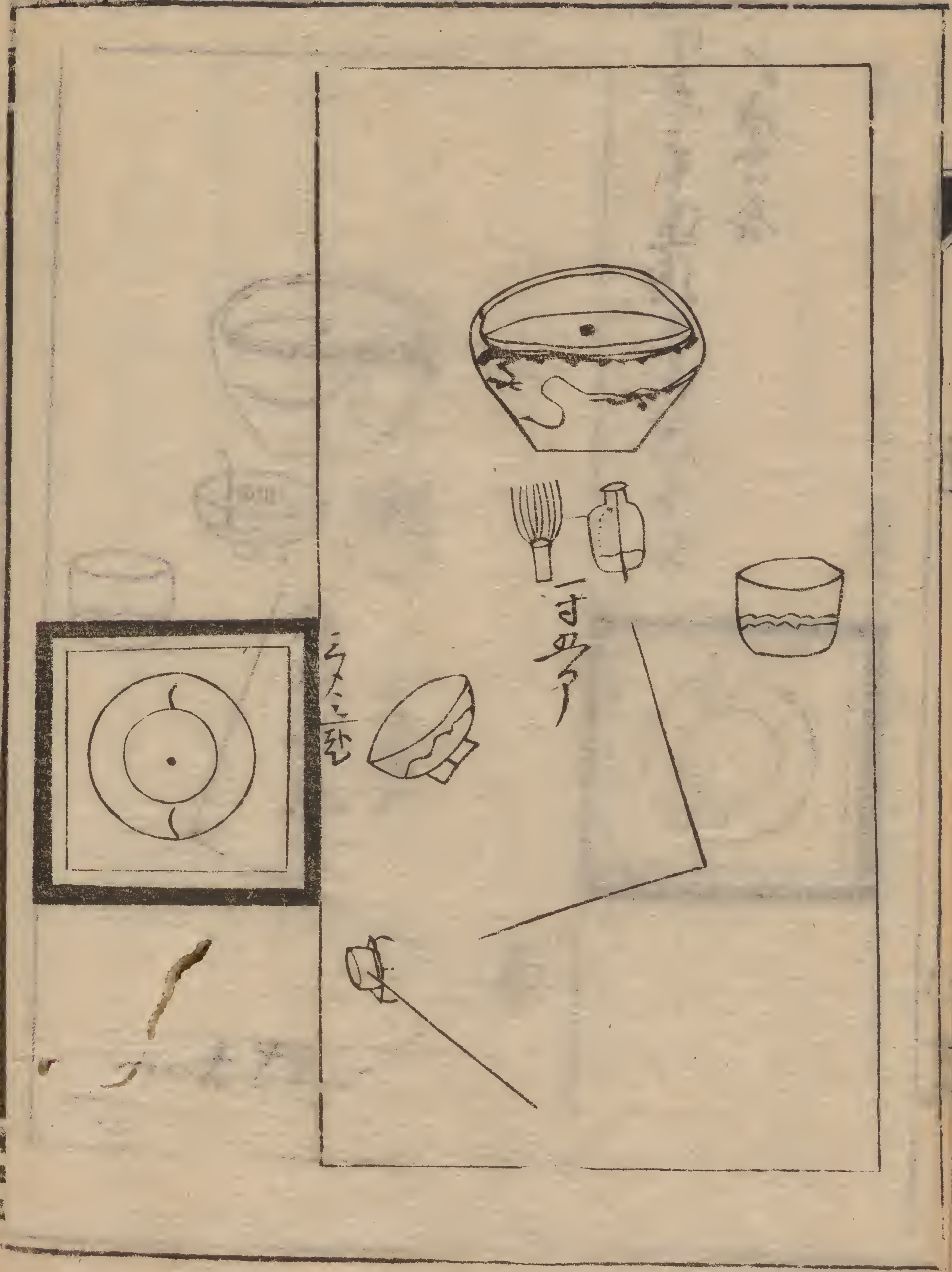
巾をたゝみ置ふくさ次に湯茶碗にて湯捨
巾ハ下に置茶巾を左にて釜乃蓋に
茶杓を置き割蓋にかけ一茶杓
入様杓しく茶碗に入茶をすくひの
まゝ乃蓋をして右の手に置茶杓
かきを左の手の蓋をとりやくに水一つ
釜へ入湯おししてかこく湯を茶碗に
茶碗に入釜のふりを茶筌にてふるべし
帛紗にて後にふくべし茶碗は
同く出して茶道口乃戸を閉入あわせ

かし巾ハ手にてとるべし
一 治に帛紗を出帛紗にてそゝぐ
左の手に水一杓入る茶碗へ入れる
ふくさを入いろを切湯一つしやく
入すゝぎ水に入茶釜をそゝぎしてかの
を拝茶巾入下に置茶釜入茶杓巾を
附にて茶杓を茶碗ハ右にふくへし
蓋茶碗をかへし右やく水の指にて
釜乃蓋をへし湯おしして道具を
乃かた置の指の蓋すべし茶碗ハ

あらしまもゑこ甚か

ほゑしす逢猪ま壽のまお
れ麈雲答



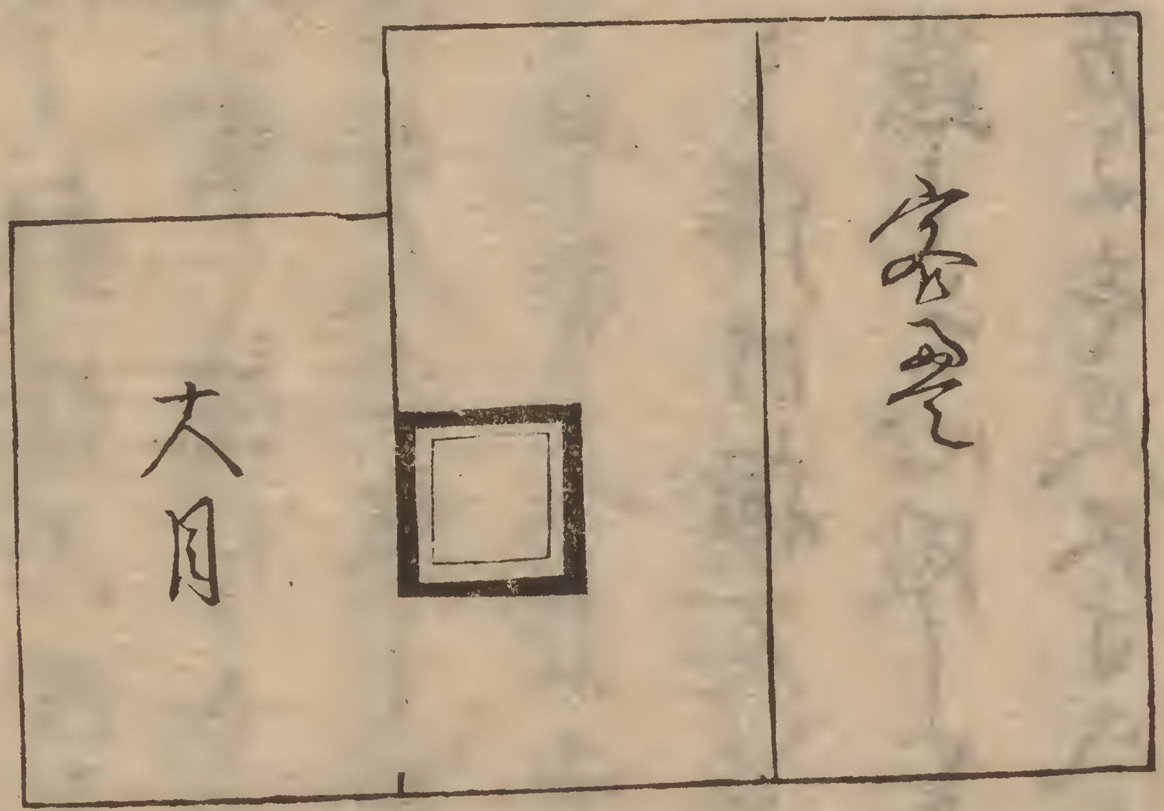


凡左會釈と云ハ常に點前の事なり、
何ごとも逆勝手乃座敷を構さる人多
點前ごと逆のさハきになる故に出る人
高位の人又ハ家訓作法のある中へ入て
ハ手前を逆にせざるハ却てに何とも
左云て順にする事も成がたく候に付て右左
云釈と點前ハやすまじひ乃後あり又土之
手前名點前でハ中通の儀よ代る
所と御傳はうへゆめく初学の人あるる
事どけなり

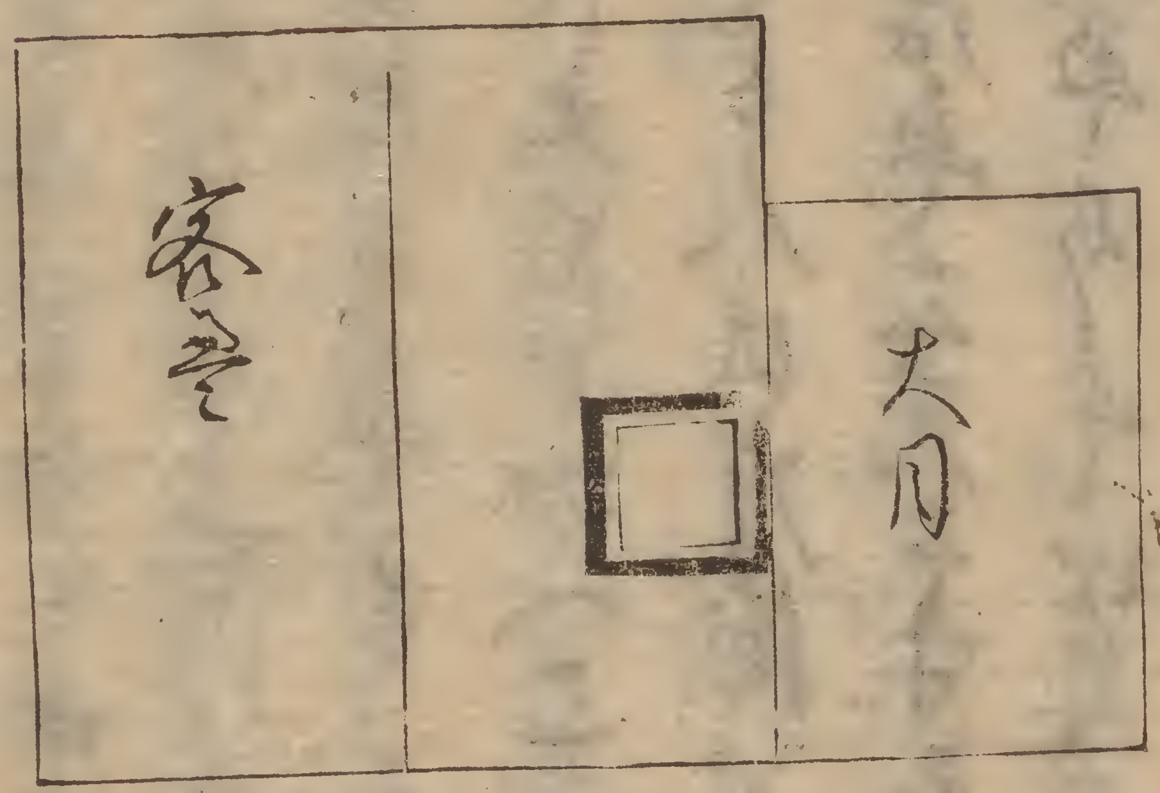
一 逆手にて取手の右に似故茶入を
表（オモテ）に置茶碗を裏（ウラ）に置る
一 此ときは宮島茶事には茶の置所
故なくいつくにも置かざり點るに
あらざるとすゝやかひろ所なり
一 此ときは濃茶を點る事なし濃茶
点ては點る事なり故に茶入まで
もおくも盆へ入ざるべし
一 柄杓のおこしいつまでも取おくし
たるべし

一 茶入を置取扱ひて茶杓にて拭入
れ置し
一 茶巾を置る時も又時もまたやりにみ
おかずくれたるから流し左にかゝれ
置し

三畳の大順勝手



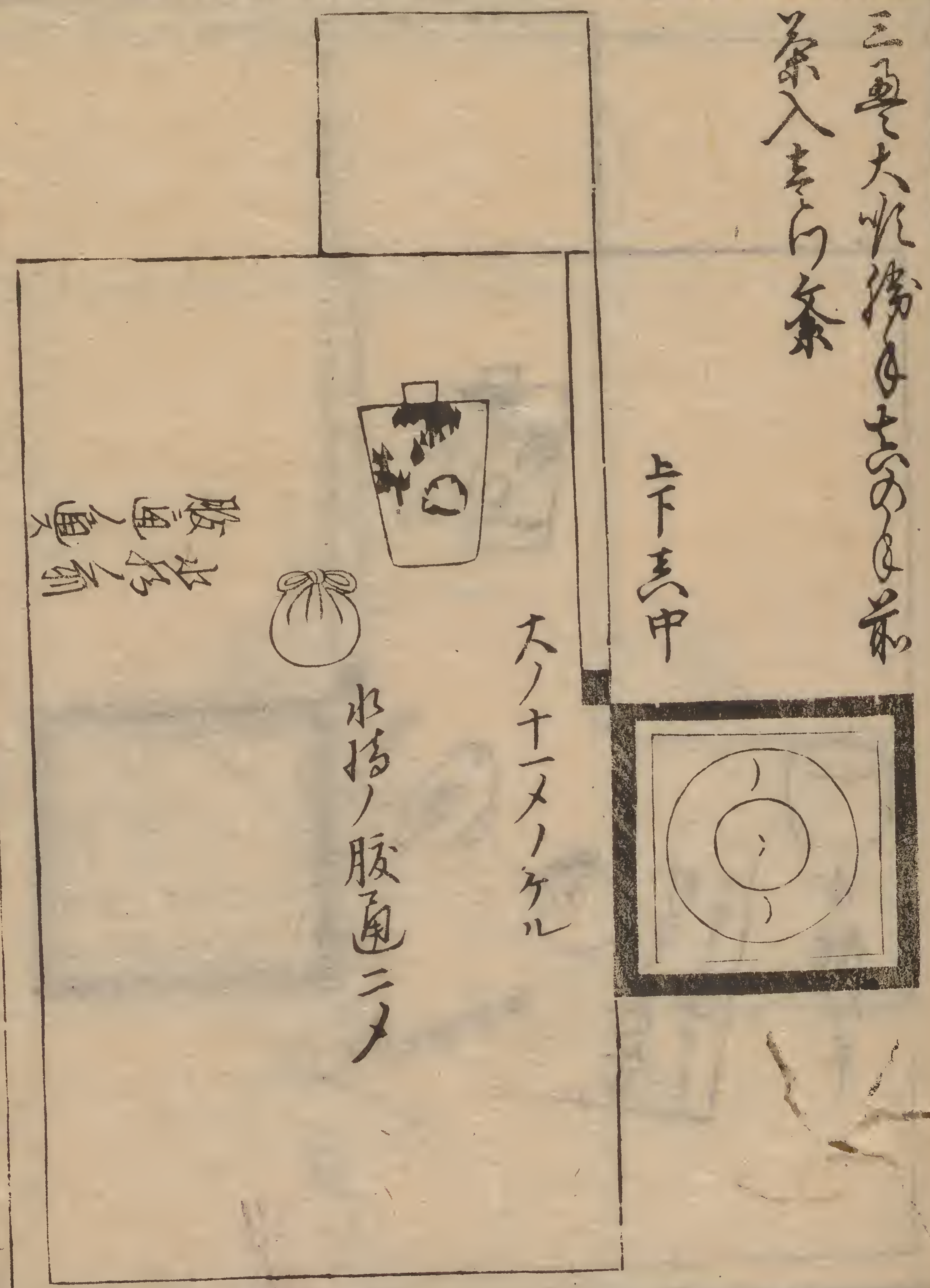
三畳の大逆勝手



此三畳大と云ハ古田織部殿の作とや
侘し利休乃時とハ壱畳半ありて中柱
建茶も湯なされしまゆへとセられし
客三人の扱をゆるしたる故壱畳まし今
壱畳なりしへ畳二畳に大目を加へ三畳
大ら侘は根元を知さる人は座敷を大
目題と云心同しきら居畳三尺壱寸五分
但方は壱尺五寸八歩入畳ありて四尺七寸
三歩とし又大工の呂かは六尺二寸の畳
を三つまおつと計り分四尺弐寸ヨ云統

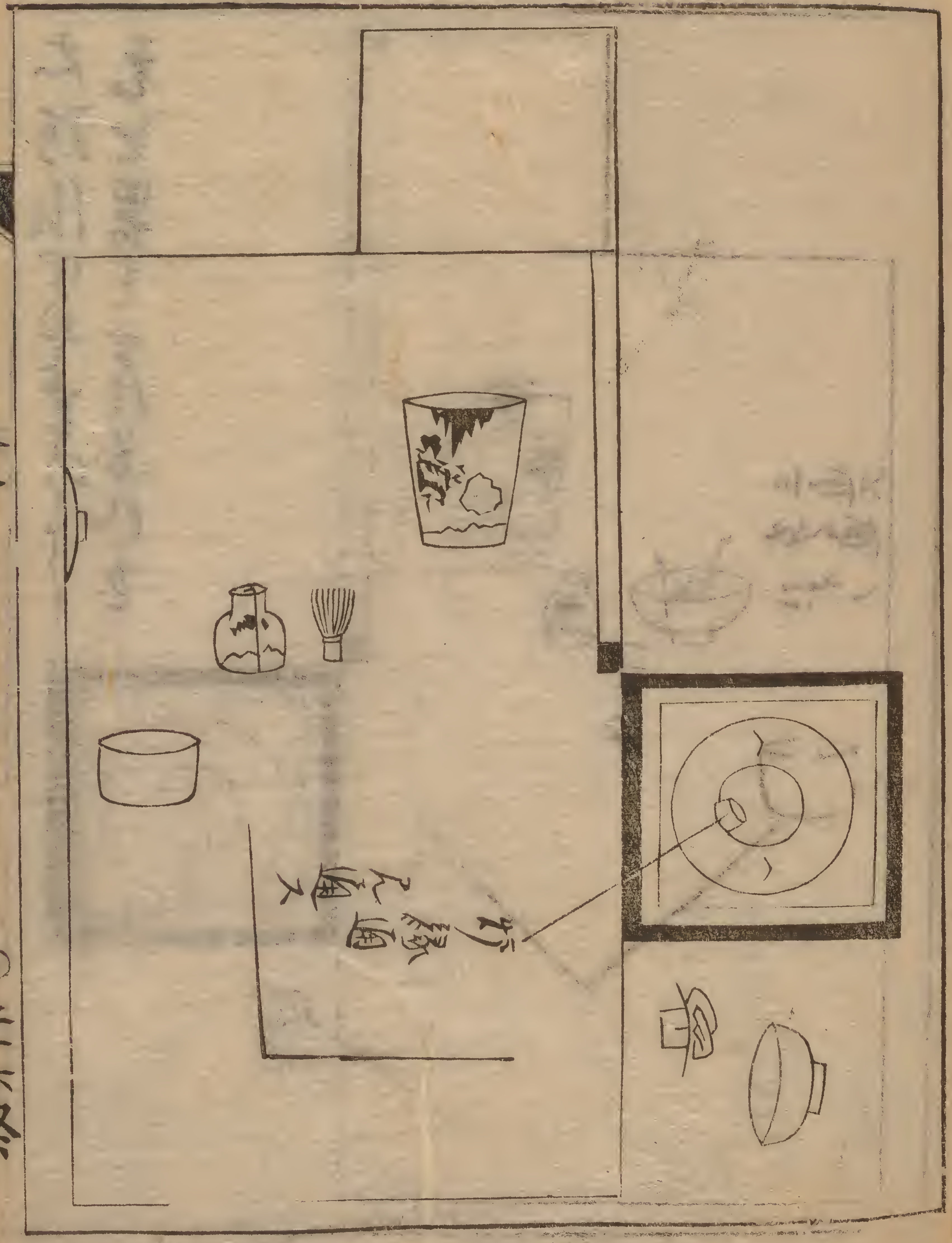
尤座敷にゆるしまて先師乃かはりしハ畳
まの炉を中柱の外へ出しを計やゆるを畳
入して見れハ四尺七寸三歩とおらまかま畳
まハ多く壱方ハ流ま家ま畳の大目と
云すまて三畳大と略して云は統帝ハ
今様ハ子細ハ右より備撰の茶水指
も昔の壱畳まかれ畳の中にを
侘おき茶入茶碗を中へ茶あら
物く前ゆかり人ハ三畳大ハ壱畳
まの炉をかへ出したる物となは

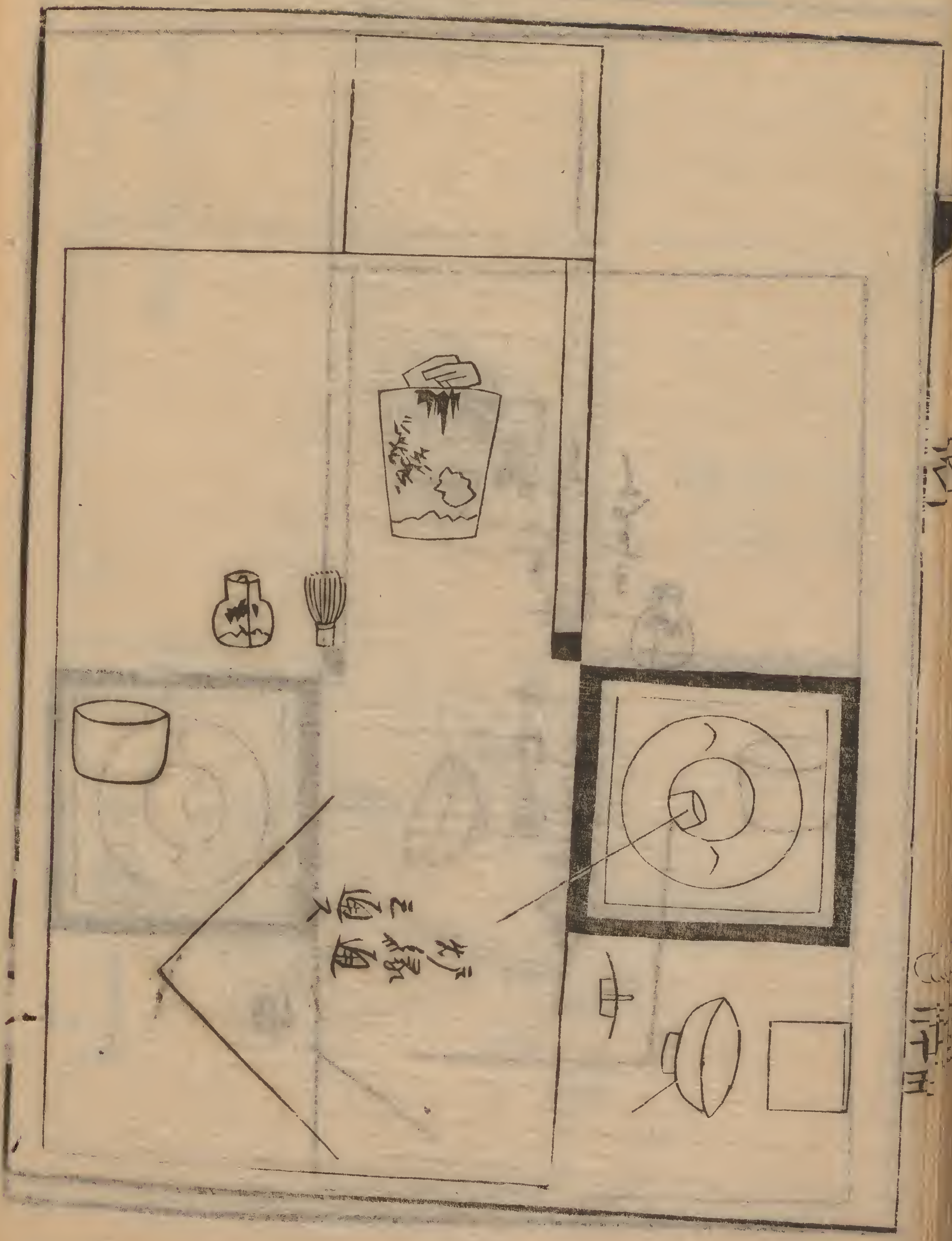
三畳大板勝手付の手前
茶入壺河条



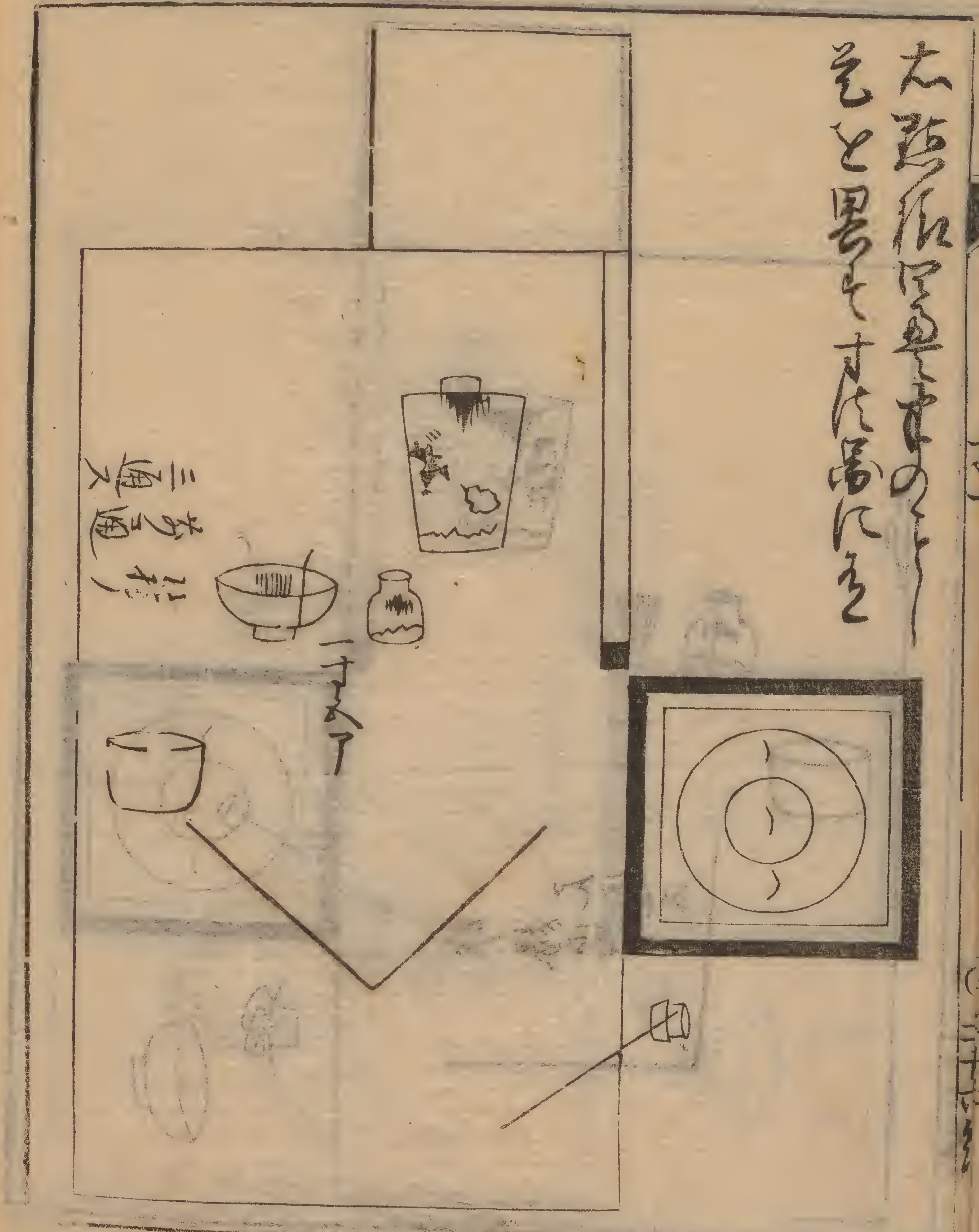
中柱ノ通
茶碗茶入杓

炉半ノ通之
ヒサゴ通リ
二メ


炉縁通
尺通ス


炉縁通
ミ通ス

太鼓張風炉先の事のくし
色と思て寸法略に之



茶湯綱目 下